

帯広事業所が取り組む業務の紹介—幼稚魚生息環境モニタリング—

おおめき つとむ
大貫 努 (さけますセンター 帯広事業所)



周囲の森に群生するオオバナ
エンレイソウ (左).

十勝川水系札内川支流ヌップ
ク川 (右).

森に囲まれた帯広事業所 (奥
に見える建物) (左).

ふ化放流事業の功績記念石碑
(右).

はじめに

北海道の中央に聳える大雪山系や日高山脈の東側裾野に広がる大平原の中央部に人口約17万人の帯広市があります。帯広事業所は帯広市南部にある大正町の閑静な場所にあります。

大平原十勝平野は畑作地帯ですが、事業所の周囲には帯広市の自然環境保全地区に指定されている原始林と間違えてしまいそうなハルニレ、ミズナラ、カシワ等の大きな樹木に囲まれた森があります。

この森にはエゾリスやエゾモモンガが住み、春にはフクジュソウやエゾエンゴサク、初夏にはニリンソウやオオバナノエンレイソウ等の野草も美しく咲き乱れます。

事業所の側をかつては清流日本一にも輝いた十勝川水系札内川の支流ヌップク川が流れ、マガモの親子が並んで泳ぐ姿も見られます。この川の中には清流の証であるバイカモやクレソンが茂っており、その間を大型のニジマスが優雅に泳ぐ姿は観る者の心を和ませてくれます。

帯広事業所の前身である帯広ふ化場(当時は民営)は、製糖工場の汚水問題により昭和4年に現在地に移転して来ました。それ以前の十勝川におけるサケのふ化放流事業は明治28年にここヌップク川で開始されようとしたのですが、1度も放流を行わずに施設が落雷焼失したと言う経緯もあり、事業所構内にはさけますふ化放流事業の功績を記念した石碑が建立されています。この石碑の裏書きには「幾多の辛苦に堪え昭和十七年に至り鮭鱒

増殖の基礎定まるを祝して企画作成し之を永く後世に伝える」と刻まれており、ふ化放流事業の先人達の苦勞が偲べれます。

業務の紹介

帯広事業所で実施する主な業務は①さけます類の効果的生産技術の開発、②モニタリング、③技術普及に大別されます。

帯広事業所の職員は6名ですが、西端は襟裳岬に近い広尾町から東端は霧多布岬のある浜中町と海岸線で313kmにも及ぶ広いエリアを受け持ち、十勝川水系に位置する十勝事業所と釧路川水系に位置する鶴居事業所と分担しながら業務を実施しています。さらに、(社)十勝釧路管内さけます増殖事業協会(以下、管内増協と記す)、地元の漁業協同組合、漁業者、北海道の試験研究機関や行政機関等とも協力、連携しながら業務を進めています。

紙面の制約上、今回はさけ類及びます類のモニタリングの一つである“幼稚魚生息環境モニタリング”(幼稚魚河川分布調査と幼稚魚沿岸分布調査)について紹介します。

平成21年の春には、十勝事業所から個体群維持のため、十勝川へ約15,300千尾のサケ稚魚を放流しました。また、鶴居事業所では資源状況等を把握するため、釧路川に約9,100千尾のサケ稚魚と約50千尾のベニザケ幼魚(降海型)を放流しました。両事業所から放流する全てのサケ稚魚には耳石温度標識を施しています。

1. 幼稚魚河川分布調査

十勝川と釧路川に放流されたサケ稚魚やベニザケ幼魚の河川内での生息環境や降下状況を把握することを目的にそれぞれの河口で幼稚魚河川分布調査を実施しています。

曳網を用いるさけます幼稚魚調査では、地元の漁業協同組合やサケ定置業者から用船し、サケ定置漁業部会や管内増協からも労力の提供をいただいで実施しております。平成21年の採捕状況や目視観察によると、サケ稚魚の最終的な降海時期が昨年より旬程度早くなっていました。これは、釧路や十勝地区ともに6月の降水量が昨年の約3倍と非常に多かったことも一つの要因と推測されます。

今年度のトピックスとしては、鶴居事業所から放流したベニザケ幼魚を新釧路川の河口で採捕できたことがあげられます。ベニザケは放流数が少ないため、河口調査での採捕は難しいのですが、今年は2尾の放流魚を採捕することができました。この貴重な2尾は、川を下るベニザケ幼魚の生理状態を把握する調査に供しました。また、十勝川の河口では平成16年から18年にかけてブラウントラウトの幼魚も採捕されました。

2. 幼稚魚沿岸分布調査

沿岸域におけるさけます幼稚魚の生息環境や分布状態を把握し回帰資源評価の基礎資料にすることを目的に、トキシラズで有名な釧路町昆布森沖で幼稚魚沿岸分布調査を実施しています。

昆布森来止臥（きとうし）の陸から沖に0.4 km 1.3 km 3.5 km 7.8 km地点の4カ所に定点を設け、鉛直水温測定やプランクトン採集等の海洋観測と2艘曳網を用いたさけます幼稚魚の採捕を実施しています。また、2艘曳網の調査にあたり、地元のサケ定置業者から用船し、サケ定置漁業部会から労力の提供をいただいでいます。

平成21年の調査では、昆布森沖で採捕したサケ幼稚魚の中に鶴居と十勝事業所から放流した耳石温度標識魚だけでなく、遠くは岩手県片岸川等、他の地区から放流された標識魚も確認されました。

これらの調査結果については、随時、さけますセンターのホームページに速報として公開するとともに、帯広事業所が開催するふ化放流技術者講習会や、漁業関係者が主催する勉強会等を通じて地域の漁業者や増殖団体、行政機関等に報告しています。

おわりに

幼稚魚生息環境モニタリングについては長期間のデータの蓄積が必要であり、また各放流群の回帰状況とも関連づけて解析する必要があります。そのため、短期間で研究開発の成果や増殖事業へのフィードバックにつなげることは困難ですが、調査結果についてはこれまでと同様に迅速にお伝えしていきたいと考えております。

関係機関の皆様におかれましては、当センターの業務に御理解いただき、今後とも御協力賜りますようお願い申し上げます。

